

廉想渉『万歳前』に見る家族・民族

— 1918年の東京・京城認識を通して —

蔡 永 姪

(2002年9月30日受理)

Family and nation as observed in “Manseidjion” of Yon Sang-sob

— Views in contrast between Seoul and Tokyo 1918 —

Chae Young-nim

Though dated 1918, the novel gropes the future of the Koreans as a nation by quarrying the causes leading to the defeat of the people’s insurrection, so-called March First Rebellion of 1919.

Key words:

キーワード:

はじめに

廉想渉は韓国近代小説の発端となった李光洙（『無情』1917）に代表される啓蒙主義的文学の後を継ぎ、自然主義・写実主義文学を切り開いた作家である。1910年、日韓併合により韓国は日本の植民地となるが、その8年余り経過した1919年3月に起きた歴史的な事件「独立万歳運動」は多くの犠牲者を出し失敗に終わる¹⁾。廉想渉は、この翌年の1920年に日本留学から帰国し作家活動に入り、この失敗に終わった「独立万歳運動」を背景にした初期話題作『万歳前』を執筆する。以後の作品を通して日韓併合下の植民地朝鮮の現実を最も良く把握した作家としての評価を得ている。

1912年、15歳で日本に渡り京都三高、その後慶応大学に入るが中退し、東亜日報創刊を機に帰国し記者となる。しかし、それも6ヶ月で退職し作家活動に入る。廉想渉が留学を通して接触した1910年代の日本は、明治の国家至上主義に反発して「西欧・世界主義」または「個人主義・自我主義的近代思想」に傾いた大正デモクラシーの時代であった。文学界では「自然主義」

「白樺派」がこのような風潮を代表していた時期である。

韓国近代文学における『万歳前』（1924）の評価について、金潤植（『廉想渉研究』1987）は、「廉想渉小説の特質を明らかにする礎石に値する作品」と位置付け、作家自身にとって記念碑的な作品であるだけでなく、韓国の近代小説史においても記念碑的作品であると評している。その理由として、日本留学時の大正時代の影響を土台にしながらも、「自分自身の声」を探り出し始めた作品であるとしている。また、金慶洙（『廉想渉長編小説研究』1999）は廉想渉小説の主要空間として、「首都京城の中産階級の家族」を描き、「家族主義が小説構成の一つの根幹」を成しているとし、その構成方法として「家と社会の平行性」が見られると指摘している²⁾。つまり、「家」=「社会」という等式を見ることが出来る。併合後の韓国近代社会を把握する手法として取られた「家」への注目は、『万歳前』においては「家否定」の様相を帯びている。

本稿では、『万歳前』における「家の現れ方」に注目し、「家否定」に至る様相の意味するものは何かを分析課題とする。分析方法としては、作品に描かれた主人公の東京から京城までの「帰路」において辿る「都市空間」の「場」における主人公の「動き」を解析することで、主人公が近代日本を、また、植民地朝鮮を如何に眺めているか、そして京城家族をどのように位置付けているかを見ていく。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：相原和邦(指導教官)、楨林滉二、沼本克明、水島祐雅

1. 東京、近代へのまなざし

主人公はW（早稲田）大学の学生。宗主国日本へ留学することは、当時の朝鮮においてはエリート知識青年である。物語の発端は、冒頭の電報による「妻の危篤」の知らせであるが、東京についての描写は、電報を受け取った主人公が夜行列車に乗るまでの何時間かの「動き」を示すことにより、近代都市東京を見せる、という構図となっている。学生である主人公の「動き」は限られているが、列車に乗るまでの何時間かの行動を見ることから、主人公の東京認識の実態を知ることができる。W大学周辺の下宿から電車に乗りK町方面（麴町）で電車を降りて旅行用具を買い、次に神保町の東京堂で雑誌を買い、その足でM軒というカフェに寄る。カフェを出てからは、隅田川沿いに沿ってQ橋、O橋、S橋の周辺を歩き、そこから電車に飛び乗って下宿へ帰宅、さらに東京駅へというかなりせわしい「動き」を見せている。

「動き」の内容を見ると、帰国の旅支度の買い物のほかに、「散髪、そして新しいジャケットを買って着る」など、「妻の危篤」で帰国を前にした主人公の行動としては不自然さを指摘することができる。その理由は「カフェの静子」という女性を意識したためであることが示される。旅支度及び静子への土産と思われる買い物を済ませた主人公は、心に咎められながらも「カフェ」に足を踏み入れ彼女に会う。「妻の危篤」という知らせを受けながらとったこの行動は、主人公と静子との関係の意味を指示することであり、その意味内容が、近代都市東京に向けた主人公の認識及び、作品の結末において東京が目指されていることへの一つの前提になっている。そして「静子のカフェ」という「場」が、神保町にあることから、当時の近代都市東京の中心地という枠組みを持つ。「静子のカフェ」は、近代都市東京が体現する意味内容を「象徴的に示す場」となっており、かつ、それは主人公の実家・京城を対比的に照らし出す構図ともなっている。

では、「静子のカフェ」を通して表されることは何か。次に示す例文から知ることができる。

a <静子の現在>

私はP子から雑誌を取り返し、静子に渡した。
 (P子は)「こんな文学者臭い二人のところには、おそれいって近寄れないわ」と言いながら、静子に横目に見た。P子にとって静子は目の上のたんこぶのような存在であった。この店に出入りする常連客は、この私だけでなく、みんな最後には静子に取られてしまうからであったが、しかしP子は静子が高等女

学校で三年も修業していること、そして小説や雑誌などを耽読していることに一目置かれているのであった。(19頁)

c <静子の姿勢>

静子の過去の辛い経験による現在の立場から、どうか這い上がろうとする思いと真の自己生活を導き出そうとする努力を考えると、私はその静子のために真に泣いてやりたかった。(27頁)

例文aからは「カフェ」と「静子」の関係を知ることができる。〈女学校〉〈小説や雑誌〉などが示す意味と〈カフェ〉は等価で結ばれない関係のもので、その点から同じカフェの女給P子との違いを示すと同時に、「訳あって」静子は「カフェの女給」になったのだ、ということを示しているのである。主人公は静子に対する思いに〈生命の内容である恋愛〉ではないと言いつつ、〈愛着〉を持っている段階を示す。静子としてもくなぜ、P子と私、二人を手玉に取り愚弄するのですか。あまり残酷すぎるじゃないですか。あなたも愛は遊戯ではないことぐらいは心得ているのでしょうか。と主人公の曖昧な態度を詰問する姿勢を示している。このことから、二人には「恋愛へ向けられた姿勢の共有」を指摘することができる。主人公と静子の関係から見えるものは、例文bのように〈真の自己生活〉に向かおうとする姿勢を価値あるものとして評価する認識軸である。つまり例文の「自由恋愛」に走った静子の今は、「カフェ」=「墮落」であり、ここから抜け出ることにおいて「真の自己生活」であるという等式が成立していることが確認できる。ここには「恋愛の真の姿」は「遊戯の否定」であることが示されている。この点、主人公のこれから帰る実家・朝鮮・京城を前にし、「カフェの静子」で示された「愛の姿」は以後の展開にどのように関与し、どのような問題を突きつけるのか。

主人公の「カフェ」からの帰り道での探索から、主人公が抱える問題局面が提示される。次の例文はそれであるが、「カフェ」から出て歩く空間で、目に映る街の風景と、それに重ねて想起する京城の実家は、下記の例文から見られるように「閉塞の空間」として喚起されている。

夕暮れに差し掛かった街は寒さが身に沁みる。昼過ぎから曇りがちになった空模様は、夕闇が逼るにつれて今にも雪が降りそうな重苦しさが増して、漸々と街の人影もまばらになってきた。通りに響く下駄の音は一層カタカタと響きを増して聞えてくる。ありこちの店先におら下がっている電灯の明かりまで寒々と眠たそうに寂しく映る。…私は足をQ橋へ向

けた。(21頁)

自分の内面に深く刻み込まれた「結縛された自己」を解放しようとする欲求が、猛烈であればあるほど、その発作の程度は一層増すのであった。言い換えれば、有形無形のすべての羈絆、すべての矛盾、すべての繋累から、自己を救援しなければ、窒息すると自覚はあっても、それを実行できない自己の弱点に対する憤慨と憐憫の弁明であった。(22頁)

街が〈夕闇〉へ入る風景に主人公の心境が〈重苦しさ〉を増し、それが故郷・京城の心象風景に重なる。この〈重苦しい〉心境は、主人公をして川辺をゆっくり歩く行為へと導いていく。Q停車場を通り過ぎ、O橋S橋へと歩く「川辺」という「場」において京城は〈結縛〉され〈窒息〉するなど、「自由」を剝奪された「閉塞の空間」として想起されている。この「自由」及び「閉塞」という二分法が、近代東京と植民地京城を捉える認識軸として想定できる。これから主人公が「帰路」に着くことで主人公の抱える具体的な問題を示しており、朝鮮・京城——結縛、窒息、解放、救援という言葉で占められた「閉塞」状態——から〈抜け出る〉ことへの希求の表明と、そのためにはある〈実行〉が伴われるべきであることが示される。以後の展開は、その方向性に向けて動いて行くことになる。ここに静子が目指すべき方向性——〈過去の辛い経験〉から抜け出て〈真の自己生活〉への道を進む——恋愛への挫折から「抜け出る」ことと重なり、お互いが抱えた問題から「抜け出る」ことができれば、それは「愛の姿」への一步を踏み出すことで二人の「自立」＝「結合」の可能性も提示されているのである。

まず、静子が抱える問題局面は、早くも主人公には疑わしく、次の例文のように壁が露呈している。

a 〈近代人〉

結局人間は、惻憫であればあるほど虚偽を反復しながら、自己以外的一切に対して、同意と妥協なしには、指一つ動かさない利己的動物である。物的自己という左岸と物的他人という右岸に足をかけて、バランスを保つしか方法がないのが、所謂近代人の生活よ、このようなピエロのような存在が人間という動物である。(23頁)

b 〈静子の問題点〉

静子が反逆者という点は賛成である。しかし自己の生活を自立していきけるだけの力があるだろうか。またその中に飛び込むだけの勇気があるだろうか……多少の自覚もあり、惻憫であるけれど……しかし虚栄心が先にくるから信用することができない。(24頁)

例文 a では静子自身に対する問題として帰り道の電車の中で導き出されている。〈電車〉の中は近代東京の人間を捉える「場」となっており、続いてこれから先の静子が向かうべき方向性、〈真の自己生活〉における問題が示されている。〈電車〉では〈近代人〉の探索がなされている——〈近代人〉の問題は上流階級には〈偽善〉が、下層階級には〈無智〉が存在し、〈物欲〉に動かされる〈利己的〉存在であると見ている——が、このことは「静子＝東京＝近代」という構図を成し、静子の抱える問題は「近代」の問題として把握される構図を持っている。その特徴として取り出される近代人の側面は、〈利己的〉ということであり、静子もこの点において重ねられ、その問題点が把握されている。例文 b がそれであるが、静子の過去・現在を〈反逆者〉として評価した上で、〈近代人〉の特徴とでも言うべき〈虚栄心〉が横たわり、その問題に静子が如何に対処するかが問い掛けられている。以後静子はどのように対処していくのか、その具体的様相は描写されず、再び静子が登場するのは、京城の主人公に当てられた手紙により、その結果だけが示されることになる。以後の展開は主人公の足取りを追うことから、〈川辺〉で示された「閉塞空間」としての京城＝朝鮮が示されていくことになるのだが、「東京の静子」の外に、もう一人の女性が登場する。

東京を発った主人公は神戸の音楽学校に留学している知人の朝鮮人女性・乙羅を訪ねているが、彼女を登場させることにより、「静子＝東京＝近代日本」の問題軸と、「乙羅と妻＝京城＝植民地朝鮮」という二つの問題軸で展開している。乙羅という女性を浮き彫りにするのに、主人公の友人・柄華（親戚でもある）との三角関係を設定している。このことから「主人公＝乙羅＝柄華」「妻＝主人公＝静子」という関係様相を示す展開となる。なぜ、主人公は「妻の危篤」という状況にありながら、東京の「カフェの静子」を、そして「神戸の留学生乙羅」を訪ねるのか。留学生である主人公を中心とした「東京」及び「神戸」という「都市空間」において、二人の女性の設定が示すものは、主人公が人生に対して如何に無気力であったのかということである。後の京城への旅路で主人公が民族の現実を見聞することにより、民族の一員であることに目覚めるのだが、その布石として、静子と乙羅への訪問が位置付けされているのである。

2. 民族のアイデンティティの亀裂

主人公が「妻の危篤」に立ち会うために宗主国日本からの「帰路」において浮き彫りになるのは何か。そ

の主眼となるものを次を例文から知ることができる。

七年近く東京にいる間、警察官以外には私は民族的観念を強く意識したことはなかった。元来政治問題に対して無頓着な私は、このような問題で頭を悩ましたことは、ほとんど記憶にない。しかし、一年二年と時間の経過にしたがって漸々敵愾心とか反抗心などが生じてくる。(37頁)

例文は廉想渉の留学体験と重ねられる場面としても読むことができるのだが、「近代」の体現である日本と、「植民地」である朝鮮との距離を総括して見せており、それは植民地知識人である主人公が「〈民族〉や〈政治〉」に目覚めていく経路としての「旅路」という問題意識が予告されている。作品の背景時間の1918年を鑑みると主人公が東京に留学していた〈七年近く〉の期間は、朝鮮が日本による併合後歩んできた時間と重なり、「日本による朝鮮の近代化の意味」が問われているのである。

では主人公にとって〈民族〉はどのように見出されるのだろうか。そのための格好の「場」が、下関から釜山に向かう連絡船の「三等室」であり、連絡船に乗る直前の〈待合室〉、〈船室の中〉、降りる間際の〈下船の際〉など、それぞれの「場」において捉えられている。連絡船の「三等室」において展開されるのは、〈亡国の民〉であることへの自覚と同時に、植民地朝鮮人へ向けられた差別の現状を目撃することから、主人公が「内面変化」して行く過程を知ることができる。

a 〈日本人同士の会話〉

黒い学生服を着た（まだ制服も着られない）船員はわざと怒りを買おうとしているのか、のらりくらりと答えていた。「私たちこそ、この船の客ではないか。お客に対して何の対応のまねだ。…いったい私たちをヨボと見ているんじゃないかね」。(49頁)

b 〈私と日本人〉

この船には、私より一段と優越であるという人（日本人）が乗っているからである。…三等室に集まった人種…私はいつも彼らに接することを極端に避けている。それは私よりは優越だとする日本人という意識が働いていることだけではない、単純に労働者とか無産者だと思うと近寄りたくもないということもある。(47頁)

c 〈優劣と劣等〉

優劣感が単に個人と個人との関係を離れて、集団的な背景に及んでは、敵対心と変わる…(37頁)

d 〈巡査と私〉

学生服にマントを羽織った格好や本人としては流暢であると思う日本語の語調が、聞くまでもなく朝鮮人であることは間違いない。しかし強いて日本語を使い、自分が朝鮮人であると見破られまいと、深慮しているような、落ち着きのない振る舞い…（中略）…私の姓名とあの人の語調を聞いて、私たちが朝鮮人であることを汲み取って知る、私と彼を往復している彼ら（下層階級の日本人）の視線の前での私達は、喜劇を演出する鸚鵡のようであった。(41頁)

e 〈私の意識〉

階段の先には、眼を光らせてこちらを見ている四つの目があった。それはまだ制服も着られない巡査補と憲兵補助員の目だ。彼らはむろん朝鮮人である。私はできるだけ平然を装った。彼らには目を合わせないようにし、確かな足取りで最後の階段を降り立った。—できることなら日本人としてみて欲しい、そのような思いを、頭の中でしきりに繰り返していた。私の平然を装った足取りは、まるで堵利場に引かれていく牛の足取りのようなものであった。(51頁)

例文 a・b は船中、c・d が乗船前後である。日本と朝鮮という境界を繋ぐ「連絡船」という「場」で表されるものは、「宗主国日本」と「植民地朝鮮」が「優と劣」という二分法で捉えられているということの確認である。その具体的様相は、a・b に見るように、日本人同士の争いの中に見えてくる朝鮮人に対する差別である。朝食をめぐる争いで、日本人客が船員に不満を表すのに〈ヨボ〉と同じ待遇をされたと怒っている。この場面を目撃する主人公の思いがわであるが、〈船中〉では〈亡国の民〉朝鮮人であることを強く意識し、「日本人優越」という事実遭遇する。他方主人公は「下層階級日本人」に対しては「優位」に立とうとするのだが、c・d から見るように主人公は晒し者になってしまう。

それは、乗船前からの私と朝鮮人巡査の間の検問から始まり、船中においても巡査に監視され続けるのだが、監視する巡査と監視される学生の主人公は「朝鮮人同士」である。巡査は主人公とのやり取りにおいて、強いて日本語を使い、朝鮮人であることを隠そうとして、あえて日本語で主人公の名前を呼び立てるなどする。「巡査と私」はまるで〈鸚鵡〉のようだと「巡査の振る舞い」に批判を向けていた主人公も、日本人による差別の視線から自由ではなく、例文 e の船を降りる時の主人公の振る舞いも、いつしか朝鮮人巡査同様、〈日本人として見てほしい〉と思ってしまうところを

提示している。この一幕は「朝鮮人のアイデンティティ」が如何に「乖離して行くのか」、その過程を提示しているのである。

「乖離」の過程を辿ってみると、憲兵にしろ、朝鮮人巡査にしろ、彼らに監視される恐怖から「アイデンティティの乖離」が生じていることが分かる。主人公は、船中における日本人と朝鮮人との関係は「宗主国と亡国」という「優劣」の関係にあることを思い知らされる。そして、乗下船時の「憲兵」「巡査」の「監視と検問」の描写の中に〈眼を光らせて…四つの目…堵利場に引かれていく牛〉とあるように、「監視下」に置かれ、「自由」を許されない植民地という枠組みのもとで「乖離」が起こることを提示している。この「朝鮮人のアイデンティティの乖離」の問題は、〈朝鮮の未来を象徴〉的に示す釜山においてさらに進行した「否定様相」を見せることになる。

つぎに、主人公が〈朝鮮の未来を象徴〉すると言及している釜山では、主人公は何を見ているのか、二つの「場」から、釜山を捉える視線の特徴を確認することができる。連絡船から下船し、停車場に着いた主人公は、列車に乗り換える間の時間に釜山の中心〈市街〉と、市街の周辺にある〈蕎麦屋〉との二つの「場」を捉えている。この二つの「場」に、「宗主国日本」が進める「朝鮮の近代化」を見る主人公の認識を知ることができる。京城行きの列車を待つ間の少しの時間に散歩した釜山〈市街〉の風景は、〈日本家屋〉が立ち並び〈朝鮮家屋〉は中心街では見ることができない。しかし、そこには多くの朝鮮人労働者であるチゲクンの群れが行き交う様子が対比的に捉えられている。このことは、釜山の「日本化」が主人公によって「貧富」の視線で捉えられていることを意味し、次ぎの例文aのようにその「貧富」を生み出す現象に〈殖産銀行〉の関わりを示しているのである。続く例文bはもう一つの「場」〈蕎麦屋〉で働く混血の少女（父—日本人、母—朝鮮人）を通し、「朝鮮民族のアイデンティティ」が否定されている現状を見せている。

a 〈殖産銀行〉

便利でいい、賑やかになっていい、遊ぶにもいい、と持ち物一つ売る。そうするともう一方の人は「ここは二階建ての家も増え、西洋屋もいくつかできたんだよ。そう、夏にはやはりたたみが便利だね。衛生にもいいしね。」と、今度は持ち物を二つ売る。誰のための二階屋よ、誰のための衛生なのか。

洋服を着た者が門前を監視し、料理屋は告訴すると威嚇する。電灯料金に追われ、新聞代金が二、三ヶ月滞る。友人を訪ねるには煙草代が、出かけるには

電車代が、と眉間を寄せている間に、家の証書は殖産銀行へ入り、新しい主人の手に渡る。そのようにして百軒、また二百軒と減っていった。

「やはり、ここは難しいや。田舎がいいわい。土地を相手にするほうが安全だ。」と逃げ出すと、また新しい移住民が入ってくる。そのようにして市街が日々繁盛していくうちに、千軒が一軒にまで姿を消していく。…（中略）…この市街の主人の住民が一人二人と離れていく時に、今日のまったく新しい主人に独占されるとは、夢にも思わなかったのだろう。（55頁）

b 〈蕎麦屋の少女〉

「いいえ、私は朝鮮人とは結婚したくないです。たとえ、お金の代わりに、金（キン）をくれてもいいやです。」とその少女は顔色を変えて答えた。朝鮮という二文字が自己の運命に黒い影をさす呪文でも掛けられるみたいな反応だ。（59頁）

例文aは、日本により近代資本主義システムが導入され、釜山の都市化が進行していること、及び資本主義システムの経済論理に、釜山の朝鮮人住民は対応できず疎外されていることを現している。反面、釜山の都市化の恩恵を受けるのは、移住してきた日本人であることが対蹠的に捉えられている。つまり、主人公は〈殖産銀行〉を通した「日本近代資本主義システム」の弊害に注目しているわけであるが、作品時間である1918年を参照すると、朝鮮各地に分立していた農業銀行を統合して作られた〈殖産銀行〉の歴史的な成立背景と附合する³⁾。主人公の〈殖産銀行〉の捉え方は、例文で示すように〈誰のための二階屋よ、誰のための衛生なのか〉と問うことから、「日本による朝鮮の近代化」に疑問を投げかけ、日本による近代化が朝鮮住民のためではなく、彼らを疎外して成立していることへ批判が向けられている。併せて、例文bのように市街の周辺に位置する〈蕎麦屋〉において、そこで働く一人の少女との会話のやり取りから、「朝鮮民族としてのアイデンティティの否定」の様相を提示し、「朝鮮の未来」を否定的に導き出している。連絡船においては「監視下の朝鮮」を、釜山では「日本化と朝鮮の民との関わり」を、「朝鮮民族のアイデンティティの否定」という形で、「朝鮮民族の現実把握」という方向へ導いていることが確認できる。

では、釜山で「朝鮮民族の未来の姿」を見た主人公が、京城に向かう「列車」において把握するものは何かを見えていく。

3. 植民地下の朝鮮民族

列車に乗り釜山を発った主人公は、朝鮮の首都としての記憶を留める京城の実家へ向かう。列車の「車中」は、朝鮮の現在を生きる人々を観察できる格好の「場」となっている。そこには、下記に記す例文のように三つの生き方を示すことになる。例文aは金持ちに見える四十代の男性らの話が金議官を思わせ、その推測から、朝鮮における「土地政策」を知ると同時にそこへ協力する朝鮮人中産階級の生き方を、例文bは隣合わせになった伝統帽子を売り歩いている〈村者〉との対話を通して下層階級の生き様を、例文cからはしばらく停車した間に目撃する巡査によって手縄にされ、監視を受けている四、五人の男女を通して日本権力に抵抗する人々を、それぞれ日本の植民地下を生きる朝鮮民族の姿として描き、ここでは「車中＝朝鮮民族の生き方」を象徴的に捉えている。

a 〈新興ブルジョアの四十代の男性＝推測金議官〉

(金議官) 妾と別れて本宅へ帰ってから間もなくのことであつた。ある日、巡査が来て、衛生費と清潔費を出すよう催促されると、「金がないんだ。無い金をどうやって出せと言うのだ。代わりになら私でも連れて行くがいい！」…(中略)…半月ほどして警察から戻ってきた金議官はどこから金を得たのか、洋服を何着も買い、酒を喰らい、その一ヶ月後には土地と家ができたからと、(別れてきたはずの) 妾を連れて京城を離れた。そして二ヶ月足らずしてあれほど尊敬してやまない存在であつた金議官が、鎖をされた犬のように従順になって変わってしまったのである。(75頁)

b 〈下層階級の村者〉

田舎で髪を切るとなれば金もかかり面倒ですよ。それだけでなく髪を切ると、あなたのように内地語も話さなければならぬし、新しい学門もできないとだめですよ。髪を切ってしまうと内地人に会って聞かれた場合、答えも碌にできなければ、官庁に行っても、道で巡査に会った場合でも色々聞かれて、それは困ることが多いです。このように(髪を切らないで) マングンをかぶっているとヨボとすぐ分かり、大体のことは見逃してくれるから、髪は切れませぬ。

以外と帽子売屋は共同墓地の話始めた。私は先ほど兄と口論したばかりであつたので、またここで話が出るのが少し奇妙に思えた。いつ規定されたのか、どのように施行されるのか、私としては知る由もなかったが、このごろ都でも田舎でも人が集ま

ると話題になるようであつた。(中略)

私は考えた。墓地を簡略にするの、縮小するの、出てきた土地は誰の手に入るかを…(77頁)

c 〈監視される人〉

駐車場の(待合室の) 暖炉へと歩いていった。薄暗い暖炉の横を何気なく見ると、手縄にされた四、五人を三人の巡査が監視している。その様子には私は衝撃を覚えた。囚人の中の一人は髪を乱して、垢で黒ずんだチマチョゴリ(女性の朝鮮服)を着た若い女もいる。私を力なく見上げてはうなだれた。(82頁)

まず、例文aの四十代の男性は、主人公の知っている金議官という人物に重ねられている。金議官は、主人公が田舎の小学校を卒業し京城の中学校に通うため預けられた、父の知人である。車中の男性は、日本人と一緒に〈土地問題〉の話をしているのだが、金議官と四十代の男性はこの「土地」という話題に共通項を有しており、主人公は金議官の人物像から車中の四十代の男性の生き方を捉えている。例文aから知ることができるのは、7年ほど前の金議官の様子、つまり併合により訪れた日本による「近代化」に如何に対応したかその過程である。

京城の〈チンゴゲ〉という場所の性格を鑑みると、「チンゴゲ＝押し寄せる近代化」の波に、「金議官＝中産階級の対応」という構図が浮かび上がる⁴⁾。そこには近代システムとしての〈衛生費、清潔費〉などを請求してくる日本の近代化に、対応のすべを知らず右往左往していたが、いつしか〈金〉を手に入れ、〈田舎に土地と家〉を買う、という変貌が見られる。さらに注目すべきは〈土地〉であり、このことは併合後進められてきた「土地政策＝日本近代化」を示すものである。「車中」の四十代の男の〈土地事件〉をめぐる会話が重ねられるのは、併合後8年が過ぎた現時点での問い直しということになる。「金議官＝四十代の男性＝新興ブルジョア」の構図が示すものは、「土地政策」に協力することで、「富を手中にする」生き方の提示にほかならない。このことは、釜山の「殖産銀行」で見られたように、日本により進められる「土地政策」が朝鮮民族をその土地から疎外し成立している状況から見ると、如何に朝鮮民族の現状とは無関係に、「自己の利益」のみに追従する生き方であるか確認できる。つぎに「金議官＝四十代の男性」に共通して見られる特徴は、〈妾〉という言葉に表れる。〈妾〉は封建社会の家族制度の範疇にあるもので、併合後は禁止されていた。つまり、「妾を囲う」という側面が示すのは、「妾＝封建」という構図を有する。金議官の金銭欲は「妾を囲う」という側面を持ち、単に朝鮮社会

の家族制度による封建的思考に止まらず、〈利己的である〉側面として見出されており、引いては「日本権力への協力」へと連動していく構図を示している。

つぎに、例文bの伝統帽子を売って歩く商売人の〈村者〉の生き方が示すものは何か。二つの話題で把握できる。一つは朝鮮式の「長髪型」をしており〈髪を切らない〉こと、そして「共同墓地」の話題に〈よくわからない〉と言う。このことが示すのは、朝鮮式の長髪は、ヨボ＝朝鮮人＝下層階級を示す差別に対する対応である。その理由は下層階級に対しては「巡査による監視の目」が緩むからである。「監視」が日常的な朝鮮においてこの人が選らんだのは、〈髪を切らない〉＝〈ヨボ〉＝〈下層階級〉を受け入れていることを示す。〈共同墓地〉の問題に対して〈よくわからない〉のは、日本植民地統治に下層階級は無智でしか対応できない側面を浮き彫りにしている。〈四十代の男性〉が示す新興ブルジョアの生き方への批判及び、「差別」「監視」の受容を示す〈村者〉に批判を向けていたが、最後に例文cが示すように、列車の停車場で目撃した〈手縄にされた〉人々は日本植民地権力体制に「抵抗」する姿を言い表したものである。そこに見られた〈朝鮮服の女〉からは三ヶ月後の歴史的な事件「独立万歳運動」で先頭に立った女（柳寛順）の姿を推し量ることもできる。手縄にされ主人公を見つめる女の視線に〈身震い〉し込み上げる〈憤怒〉から、汽車に飛び乗った主人公は〈この車中は共同墓地だ！〉と心の中で叫ぶのである。「車中＝共同墓地」であるという喩えが示すものは何か。

京城に向かう〈車中〉は、この日本植民地政策に対応する朝鮮民族の姿を総体的に捉える空間として成立していることが確認できる。〈土地事件〉〈共同墓地〉という一連の話題に見る日本の植民地政策は、〈出てきた土地は誰の手に渡るのか〉を主人公は直視しており、釜山の〈殖産銀行〉同様、〈政治問題〉として浮上させており、これらの事実は1910年日韓併合以来進められてきた「土地政策」が1918年に完了し、土地の所有権を無くした人々の歴史事実とも符合している⁵⁾。それに対応する「朝鮮民族の生き方」を示したのが「車中の三つの生き方」となるわけであるが、その結果として導かれるのは、日本体制に対する「協力」「受容」「抵抗」の姿勢である。朝鮮における「土地政策」が朝鮮民族を「疎外し」「アイデンティティの否定」に結びつく以上、ここに目を向けるならば、三つ目の「抵抗」を示す生き方が、最も朝鮮民族に要請される生き方であろう。しかし〈手縄にされ〉〈監視〉されていることから、その可能性は望めない。この現状を把握した主人公の認識が〈共同墓地だ！〉という

喩えに収斂されているのである。

「墓地」「死」に伺える絶望的な認識、ここには「旅路」を通して見て来た朝鮮の現実認識の総体像が結ばれている。しかし見逃せないのは〈共同〉という言葉にある。ここには「死のイメージ」を纏ってはいいるが、「共同＝民族」であることをも強く喚起している。共同墓地は日本権力側からすれば、朝鮮の「土地の国有化」を計るための一環であるが、しかし朝鮮の民を「民族」として束ねる可能性をも内包しているのである。ここでは主人公の「旅路」が「民族に目覚める経路」としての仕掛けになっている。次章では主人公の「妻の死」をめぐる家族の姿が展開されるが、このことは、「車中」で示した三つの生き方の中で、「新興ブルジョア」が抱える問題に絞られ、「新興ブルジョアと民族」の関係が問われる。

4. 京城、植民地下の新興ブルジョア

物語を起動させたのは主人公の「妻の危篤」であったが、そのためいよいよ京城駅に着いてから主人公がとった行動範囲は、自宅に居る外は従兄弟の柄華を訪ねたこと以外にない。自宅は京城駅近くの南大門の周辺、柄華の家は東大門付近となっている。そこでの描写は、「自宅と柄華の様子」に絞られており、結末は「妻の死」を見届け、再び東京への旅支度をするとするまでとなる。そしてそこには京城の「都市空間」の風景を捉える描写は見られない。京城駅から南大門までの人力車による帰宅途上における周りの風景にも、柄華の家に行くために乗ったであろう〈電車〉の中でも、京城の風景及び人々に対する描写はまったくない。もっぱら実家の「家の内部」描写に徹しているのである。

主人公の実家は部屋割りから朝鮮の中産階級の家屋構造をとっていることが確認できる。また京城の南大門近くに家を構えていることから裕福な家族という設定となっている。主人公が中学校に通うために〈田舎〉から出たという記述から、元来この南大門付近に家を構えていたのではなく上京してきた新興新興ブルジョアということになる。そのような移動を可能にする〈金力〉のある「家」、ということが想定できよう⁶⁾。このような主人公の実家を通して明らかになることは何なのか。その展開は、「妻の死」を分岐点にその前後の「主人公と家族の動き」であるが、そこには「無気力な」主人公が「家族と対立」し「積極的な」行動を見せることになる。

主人公の「動き」が「サラン屋、越屋、若サラン屋」を移動することによって、「サラン屋＝父、越屋＝妻、若サラン屋＝主人公」の現状を捉えている。まず「サ

ラン屋の父」が見せる「動き」には二つの側面が指摘できる。一つは、出産後の主人公の病妻に対する処置に対して、近代的な〈総督府病院〉または〈洋医者〉に診せることを拒み、〈漢方薬〉を固守する「非合理的＝封建的」側面である。二つは〈政治〉欲望に連動する「植民地体制協力」の側面である。以下の例文は主人公の妻の「危篤状況下」において見せる、父の「動き」である。

a 〈サラン屋の空間〉

三、四日間が過ぎた。父は何がそんなに忙しいのか、朝食の後には金議官と一緒に出て、夕方日が暮れる頃に、お酒に酔って帰ってくるか、知り合いを連れて帰ってきたりした。宗家の兄に聞くと、このごろ同友会の年末の総会があるから…(中略)…同友会というのは日鮮人とは何かを標榜した貴族たちを中心にした集まりである。彼らは昼間は碁や将棋で時間を費やし、夕暮れになるとお酒を飲む口実を探す集団の会である。(89頁)

b 〈主人公の思い〉

彼等は朝から一杯、昼にも夕方にも一杯である。持っているものは有るから一杯、無い人は無くて一杯という具合である。彼等は利那的現実から逃れるのが、何よりも価値があることよ、そうするには杯を傾ける以外にない。彼等は生きているのではなく、生きている事実があるのみである。To live ではなく To compel to live である。能動ではなく被動なのだ。(94頁)

例文 a は主人公が実家に着いてから三、四日の間に見届けた「家の実態」である。家の中心と言える「サラン屋の父の動き」であるが、ここに注目すべきことは列車の車中でも引き出された金議官との関連である。すでに述べたように金議官は、田舎に〈土地と家〉を買い、〈妾〉と一緒に京城を離れたはずの人物なのだが、今現在は「サラン屋」に出入りし父の政治欲に付け込み、漢方医の紹介など取り入り、陰で父をそそのかし動かしているのである。金議官は〈土地〉を利用して金持ちになるために日本権力に便乗して、「富」を手に入れようとする人物であった。こうした結果、主人公の妻を〈洋医者〉にかからせることなく死に至らせるという構図が「サラン屋」で見出される。このように父の留守中に「サラン屋」で繰り広げられている一幕が例文 b である。ここには、「京城＝家族＝新興ブルジョア」をどのように眺めるのかが示されている。この「新興ブルジョアの生の姿」は、〈生きている事実〉があるのみで、〈生きている〉ことにはなら

ないとし、その評価の認識軸は「能動と被動」という言葉に見出されている。それは「サラン屋」で示す「被動＝受身的な生の姿」に批判が向けられているのである。この視線は「サラン屋」の人々を批判しつつ、それまで「傍観」していた主人公に最も痛烈な批判が向けられていく。主人公は妻と十三歳という早婚で結ばれ、結婚後東京へ留学したため、主人公と妻との間は形だけに近い夫婦であった。結婚生活十年あまりの間、家の嫁としての努めと三ヶ月になる子供を出産しただけの人生であったが、出産後遺症で病院にも診てもらうこともできずに死に至ることに、主人公と言えば何の「手を打つ」ことなく「傍観」していた。つまり、ここに見る「妻の死」は「父と主人公及びサラン屋の人々」＝「新興ブルジョア」に見る〈能動〉ではない〈被動＝受身＝傍観〉的な「生の姿」を捉えることであり、主人公はこれに「抵抗」すべきであるとする自覚に至るのである。

では、主人公はこの実態にどのような対応を見せるのか。一つは「妻の墓地をめぐる処置」に現れ、二つは「静子と乙羅」への決別に現れる。まず、「妻の墓地」をめぐる次の例文で見られるように〈祖先の墓〉を否定し、〈共同墓地〉への方向性が示される。

a 〈兄の対応〉

「お前も他人事のように言うなよ。総督府が共同墓地制度を設定したのは、良くも悪くも従うとして、代々の山である先塋(祖先代々の山)が人の手に渡り…(中略)…それにお前の嫁でも万が一の時には祖先代々の山のどこかに墓を作らないといけないういよ(70頁)

b 〈主人公の対応〉

私はすべてのことを兄に任せきりにして、サラン屋から出て、煙草を吹かした。しかし、遺体を清州(祖先代々の山のある)まで移送することには絶対に反対であった。五日葬にするの、どうの、との論議も止めて三日葬にし、共同墓地に埋めた。妻の実家から来た人たちは、心良く思わないばかりでなく、妻が死んだのを私が喜んでいるとも思われるのを覚悟して、私は意のままにことを運んだ。(99頁)

二つの例文では「墓地問題」をめぐる、主人公と兄の考えが対立している。兄は男の子を得るために年若い〈妾〉を家に入れ、「墓地問題」に関しては世間体を気にするなど、因習的な思考の持ち主かと思えば、住んでいる洞里周辺の地価が日本人の進出によって値上げしたと喜ぶなど、「現実利益」を追う側面を併せ

持つ人物として「サラン屋の父」に重なる。それに対して主人公は死んだ妻を兄の反対を押し切って「共同墓地」に埋める行動に出る。さらに残された自分の子供を男の子のいない兄に譲ることで〈祖先代々〉という家の論理から自分を切り離す。これら、〈祖先代々の墓〉と〈共同墓地〉の意味するものは何か。ここには「祖先の墓＝家」「共同墓地＝民族」の構図を有する。京城に向かう汽車での「共同墓地＝民族」の比喻は、京城の家族を把握することから「妻＝共同墓地＝民族」「妻の死＝民族の滅亡」という構図が導かれてくる。ここから「妻の危篤」の前後の対応は、「民族の危機」に重ねられることにより、その対応の把握が民族に対する対応の把握となる。その結果が京城の実家の「サラン屋」で探索された〈能動〉ではなく〈被動〉の受身的な生き方への批判、〈刹羅的な現実〉を生きる姿への「抵抗」により「妻の再生＝民族の再生」「死から生へ」の転換が模索される。このことは主人公の「静子と乙羅」との決別、死んだ妻との「再結合」の表明に向かう。

まず乙羅との決別から見てみるが、主人公は乙羅の何を否定しているのか。

a 「(主人公は) 女が二人もいることは、どういうことですか」

「あ、その乙羅とかなんとかいう女がおるじゃないか。その女に学費を出しているんだよ。柄華は」
(96頁)

b 昨年秋のことだったろうか。乙羅が学校の寮に入る時に噂になっていることを思い出した。ある下宿の主人とできているという噂であった。このようなことを考えながら、改めて乙羅の顔をまじまじと見た。
(32頁)

c とにかく柄華が乙羅を恋慕い、乙羅もあとのことはともかく、柄華の心を受け入れ、身を許したことは事実であろう。だから今学費をもらっているだろうし。それなのに両天秤の態度をいまだ取っている。私に近付こうとして、作を労し、柄華まで利用しようとするのは、なんと見苦しいことか。(103頁)

例文 a から乙羅は、主人公の従兄弟・柄華と愛人のような関係にあり、神戸における留学資金の提供を受けていることが分かる。例文 b では、主人公が東京から帰る際に連絡もなく突然神戸に乙羅を訪れるが、乙羅は愛嬌を振りまき誘惑しようとするなど、乙羅の「愛欲」に注目している。つぎの例文 c では、主人公の「妻の死」により乙羅は一層積極的に柄華まで動員して主人公に接近しようとする。乙羅が柄華と主人公

を〈両天秤〉にしているのは、乙羅の「利己的な愛欲の問題」の提示であり、主人公の乙羅への断りは、「利己的な愛欲の否定」への表明である。また、東京の静子との決別も同様に把握することができる。一方、東京の静子は手紙でカフェを辞めること、京都で学校に入るための学費の援助と、主人公と一緒にになりたいという願いをほのめかす。「妻の死」後に届けられたこの手紙に、主人公が出した結論は、手持ちの金を〈学費〉として送金し、一緒になる申し出は断り、「妻と精神的に再結合」することを伝える。静子への未練は残しつつも、主人公は静子との関係が「愛欲」「金」に左右された関係以上のものではないことを自覚し、送金することで静子との関係を打ち切ることを決心する。

最後に「妻との精神的な再結合」を表明した主人公は、何を打ち出そうとしているのか。「帰路」を通して植民地下の現実を生きる朝鮮民族を目撃したことにより、無気力から成長し現実を傍観することなく「民族の一員」として生きることを見出した。民族の現実を踏まえること無しに、「真の自己生活」の実践は成立しないことの表明である。その実践へ向けた第一歩が、妻を「共同墓地」に葬り、自分を「家の論理」から切り離すことであった。民族としての自己発見は男女の「精神的な合一」を理想に置いた「純真無垢な神の愛」へ向かうことが示される。「妻との精神的な再結合」、それが「自己と民族の再生」への選択であった。

おわりに

主人公が東京の「カフェの静子」と向き合う姿は、「愛情」を持ちつつ、「遊戯と恋愛」の狭間で揺れ動きながら自由を希求する「愛への理想」を夢見る姿であった。これに対比される京城は、自由を奪われた抑圧された「閉塞の空間」として捉えられている。以後の「旅路」はこの「閉塞状況」の提示、そこから抜け出るための「実行」という意味合いを持つ展開となる。

東京を出発し、京城へ向かう「旅路」において、まず、連絡船の三等室を「場」に「監視下の朝鮮」という枠組みで、「朝鮮人のアイデンティティ」の揺らぎを捉えている。朝鮮第一の港を持つ釜山では、朝鮮の将来を象徴的に捉える「場」として、「市街と殖産銀行」の関係、さらには「蕎麦屋と朝鮮人のアイデンティティ」の関係を提示し、自分という「個」に背負わされている「民族及び政治問題」への自覚へ向けられている。

釜山で示唆された日本人による都市化は、「政治の問題」として展開され、京城に向かう列車の「車中」

は、日本植民地下の「朝鮮民族の生き方の問題」として提示されている。そして首都であった京城では新興ブルジョアの一家族を描くことで、当時の「朝鮮の閉塞状況」を示し、朝鮮民族の置かれた現状を解決するための可能性を模索している。それは、日本体制に協力することで「権力」と「富」を得る新興ブルジョアの生き方及び非合理的で封建的な生き方に批判を向けている。無気力だった主人公がこの状況から抜け出るために取った方法は、妻の共同墓地への埋葬、乙羅との別れ、静子との決別である。これらは家族論理から自分を切り離し、愛欲の否定、純愛の理想を立てることにより、自分と民族の再生を計る方法としての選択であった。

ここに「独立万歳運動」の失敗を経た廉想渉が、主人公を通して「精神的な解決」を図っている姿勢が読み取れる。その姿は「純真無垢な神に近い愛」によって完成されるものであり、それが「自己と民族の再生」の道であった。

テキストは『廉想渉全集1』民音社 1987年を用いた。本文中の引用は筆者の訳による

【注】

- 1) 独立万歳運動：1919年3月1日を期して始められた朝鮮近代史上最大の反日独立運動。第一次世界大戦以後、民族独立運動や革命運動が世界的な高まりを示したが、朝鮮でも独立を達成しようとする動きが一段と活発になった。①独立宣言文朗読②日本政府の朝鮮併合は無意味であり即刻独立を認めるべきであるとの通告文を送る『朝鮮を知る事典』平凡社 1986

- 2) 金潤植『廉想渉研究』ソウル大学出版会 1987.1
金慶洙『廉想渉小説長編小説研究』一潮閣 1999.2 86頁
- 3) 殖産銀行：朝鮮殖産銀行を指す。朝鮮総督府の政令にもとづき、朝鮮各地に分立していた農工銀行六行を併合して1918年に設立された特殊銀行。とくに産米増殖計画とのかかわりが大きく、東洋拓殖株式会社とともにその推進機関とされた。農事改良、土地改良ならびに水理事業への貸付けがとくに大きい。『朝鮮を知る事典』
- 4) 「南東、南西部を日本人街、新市街としていった」のに対し、古くからの朝鮮人街は「北東部にあった」とする。さらに川村は『朝鮮風土記』から「内地人の家屋は此南大門の本町、南大門通を中心に龍山方面へ東南部に伸び、朝鮮人の家屋は金路を中心として西北部に集団し昔からの朝鮮街を形造ってゐる」と引用している（川村湊『ソウル都市物語 歴史・文学・風景』八四頁参照）。〈チンゴゲ〉は日本人が京城に住み始めたところで、以後南大門周辺へと広がる。
- 5) 土地問題：「植民地当局が第一に関心を持ったのは、明治日本と同様の合法的な土地制度を確立して財政基盤を強固にすることであった。土地調査の目的は土地の所有者を確定し登記を行うとともに、地価を設定することで、それによって徴税や土地の売買を容易にし土地の有効利用を図ること」などを指摘し「土地所有制度の公正さにはかなり疑問がある」と指摘している。『二十世紀の日本「植民地」—帝國50年の興亡』マークピーティ著 浅野豊美訳 読売新聞社 1996. 12
- 6) 注4) を参照

(主任指導教官 相原和邦)